

「セ・ロム」はゲーテの人柄をナポレオンにして「セ・ロム」(これぞ、人間だ!)と言わしめた伝説の言葉。
「エッセイの森」は面白く、有意義な読み物(木々)がたくさん集まり、森の如く知の緑を成す(SDGs)ことを意味する。

ジョークサロン会員 / リレーエッセイ⑦

旅の途中【ロンドン・パブ物語】

旅の楽しみ方は人それぞれ。私はひとつの街に長く滞在し、その街の空気を感ぜ、風景や郷土の食べ物・飲み物を楽しみ、そこに暮らす人々の生活を眺め人々と接することを楽しむ、そんな旅が好きです。また、テーマを決め、それに沿った旅をする。例えばフランス各地のワイナリーを訪れる旅、パリのバス路線を乗りこなす旅(パリのバス路線はとても複雑)、ネッシーの写真を撮りにスコットランドのネス湖に(因みに三度挑戦しましたが)、イギリスでは庭園を巡る旅、ロンドンのパブを巡る旅、スペインのバル巡りの旅等々。友達からは「無駄が多くて時間をもったいない」と呆れられることもありますが、一つの目的に時間をかける旅も面白いものです。

今回はロンドンのパブの話をしようと思います。

ロンドンには約30年前に長期滞在して以来何度も訪れていますが、ホテルに荷物を置いて先ず向かう先はパブ(Public houseの略)。パブはイギリスを感じる場所のひとつだと思います。これまでに訪れたパブは数知れず。お気に入りのパブも数件で済ましました。

では、ご一緒にパブ・クローリング(パブのはしご)にレッツ・ゴー!
—パブは地元民の社交場—

パブは入り口が狭く外から中が見えない店が多いので入りにくいと感ぜるかもしれませんが、店内では客がビール(の人がほとんど)やワイン片手にお喋りを楽しんでいます。パブは地元民の社交場といったところでしょうか。

まずはバーカウンターに向かいます。カウンターの向こうから店員が「ハイ」とにこやかに迎えてくれます。日本の居酒屋と違うところは、パブはすべてカウンターで注文が原則。テーブル席から「おねえさん」と呼んでも来てくれません。

パブは、ビールがメインと言っているでしょう。勿論他のアルコール類やコーヒ、紅茶もあります。バーカウンターに並んでいるのはビアポンプ(サーバー)。ビアポンプのプレートにビールの銘柄が書かれているのでそれを見て注文します。お店によって異なる種類のビールが並んでいます。日本の地酒のような感じでしょうか。いろいろなビールに出会えるのもパブ巡りの楽しみですね。

以前はバーカウンターにスキンヘッドで腕にタトゥーたっぷりのお兄さん(見た目と違い優しい)がいるパブが多かったのですが、観光客にソフトなイメージを与えようとしたのかロンドンオリンピックあたりを境に女性スタッフのほうが断然多くなっています。個人的にはバー

カウンターには強面のお兄さんのほうが似合っているような気がするのですが……。

—パブは食事を楽しめる—

注文の単位は1パイント(568ml)とその半分のハーフパイント。ビールを注いでもらったならその場でお勘定。好みの場所(テーブル席、立ち飲み、外飲み)で飲みましょう。食べ物もカウンターで注文し、料理が出来るテーブルまで持ってきてくれます。

地元民らしきお兄さんやおじさん達は立ち飲みが多いように感じます。グラスが空になっても何のその。お喋りはまだまだ尽きません。

パブでビールを頼んで驚くのは泡がほとんどないことです。これは法律で泡の割合が何ミリ以下と決まっているからです。イギリス人が日本でビールを飲んだら泡の多さに驚きそう。

パブはお酒を飲むだけでなく食事処でもあり、フィッシュ&チップスは有名ですね。ミートパイもお勧めです。フィッシュ&チップスはポリウムがあり、二人で一皿が適量です(個人的には)。私はパブでよくホームメイドのスープを頼みます。小腹が空いた時などに丁度よい量なのです。

—パブサイン—

パブの看板(パブサイン)を眺めて歩くのも楽しいもので、看板にはイギリス文化が詰まっているように思います。500年も前から続いているパブもあります。Prince of Wales、Georgeなど王室にちなんだもの、



【Red Lionの看板】

Nelson, Shakespeare, Swan, Lion といった単語もよく

見かけます。中でもRed Lionという名のパブをよく見かけたので、「パブのチェーン店?」と思っていたら、Red Lionはスコットランドの国章(紋章)で、スコットランドのジェームズ六世がイングランド王として迎えられて以来、その名を付ける店が増えたとのこと。今もイギリスにはRed Lionという名のパブが600軒以上あるそうです。歴史を感じるパブ、内装が美しいパブ、洞窟のようなパブ等々。パブ巡りの旅はこれからも続きそうです。さて、程よく酔いが回ってきたようです。今回はこの辺りでお開きしたいと思います。

著者プロフィール

こしま ゆうこ
小島 裕子



山梨県生まれ。玉川大学文学部卒業後商社勤務。夫の転勤でロンドンに二度の滞在。滞在中イギリスの文化について学ぶ。以来、『暮らすように旅する』をテーマにヨーロッパ各国の旅を楽しんでいる。現在は、ジョークサロン、NPOロングステイクラブ(海外ロングステイのアドバイス等)、東京SGGクラブ(外国人観光客の都内ガイド・博物館ガイドボランティア)で活動。趣味は旅、ワイン、落語鑑賞、世界のポストの写真収集など。